

2018（平成 30）年度 映像研究科アニメーション専攻 修士小論文/制作記録

見えない力を見えるようにするための芸術
その方法

Art and creative methods to unveil invisible power

東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻

学籍番号 3217354

齊藤光平/Kohei SAITO

指導教員 山村浩二

2019 年 3 月 15 日

目次

修士小論文「見えない力を見えるようにするための芸術 その方法」

要旨／Abstract	3
序論	4
第1章 最初の留学	5
1-1 詩との出会い	5
1-2 屋外で制作する	6
1-3 自然と向き合うとは	9
第2章 二度目の留学	10
2-1 モチーフの発見	11
2-2 良い絵とは何か	12
2-3 描く行為と自然の振る舞い	14
2-4 構成	15
2-5 海の声	15
第3章 帰国後	16
3-1 編集	16
3-2 あるがままである事	17
結論	19
謝辞	20
制作記録「舞空 / Dissipate」	21

題目 見えない力を見えるようにするための芸術 その方法

Title Art and creative methods to unveil invisible power

要旨：

修了作品『舞空』の制作過程は、目的に向かって一直線に進むようなものではなかった。絵コンテは無く、テーマもあらかじめ明確に決まっていた訳ではない。制作過程を当時の出来事や心境と共に振り返る中で、一見秩序立っていない制作過程のうちに、作品がどのようにして出来上がっていったのかを浮かび上がらせることが出来たらいいと思う。

Abstract:

The production process of my graduation film “Dissipate” was not a straight line toward a fixed goal. There was no storyboard, and the theme was not clearly decided in advance. As I look back on the production process, as well as all the events and circumstances of that period of time, I will try to highlight how the work was completed, through a seemingly disorderly production process.

序論

論文のテーマとして、見えない力を見えるようにするためにどうすればいいのかという問いを立てた。筆者の考えでは、見えない力を見えるようにすることが、芸術の役割だと思っている。だから簡単に言えば、どうやって作品を作るかについての論文だという事になる。そのために修了作品『舞空』を言葉で解体し、テーマに沿って制作の順序や技法、演出意図を解説していくというやり方があるだろう。しかし今回そのような方法は用いないことにする。というよりもその方法は適さないと言う他ない。なぜなら元からそんな風にして作品を作っていないからである。実際の制作過程は手探りで、感情に左右されていて、そして何よりその場で得た実感を頼りにしていた。計算して作り上げたプロダクトではなく、偶然の産物と言った方が似合うような物である。例えば絵コンテを作らなかった。この方法の良し悪しはさておき、大事なのは制作をしながらその場その場で考えて選択を重ねていきたいと考えていた事だ。しかし選択の理由がいつも明白で理性的なものだとは限らない。自分の場合、その選択の理由を自分でも分かっていない事や、後で意味付けしている事が多いように思う。『舞空』もそういう未消化な部分を抱えたまま出来上がった。そういった態度は作り手としてプロフェッショナルではないという意見もあるだろう。しかし少なくとも今の自分は、それが作品を作る上で悪い事だとは思わない。だから本論は自分でもよくわからないものを形にしようと試みた時に何を行ったか、そしてその結果がどうだったかということを考察するものになる。それがこの論文で示す方法論である。ところで筆者は『舞空』を制作する過程で韓国へ二度の短期留学を行っている。本論はその留学先での経験を書き連ねることに比重を置く。第1章では最初の留学と帰国してからのこと記す。ここには制作に至るきっかけが含まれる。第2章では実際に撮影を行っていた二度目の留学のこと。そして3章で編集を行った帰国後のことに言及する。

第1章 最初の留学

1-1 詩との出会い

3月から6月まで韓国芸術総合学校に短期留学していた時、毎週火曜日11時から13時までの時間 “Exploring Chinese Language”という名のついた中国語のクラスに参加していた。授業の内容は単なる語学というわけではなく、語学もやりつつ、毎回漢字を一文ずつとりあげ、その字の成り立ちや、字の意味に関連した中国の美術や詩を学ぶというものだった。中国人の女性の先生が1人と生徒が5～6人、小さい教室で黒い長机を囲み、プロジェクターで壁に直接投影した資料のスライドを見ながら授業が行われた。火曜日は1週間で一番待ち遠しい日になった。自分はとにかくその先生が好きだった。先生はとても豊かな心の持ち主で、身近にある事物の美しさを愛し、その美しさを他人に伝えることに優れ、生徒にも慕われている人物だった。（そして歌が上手。）自分があれほどその授業の間様々なことに感動し、その後も暫く心の平安が持続するほどに絶大な効果を持っていたのは、今思い返すとその時の自分は、先生の目を通して世界を見ていたからかもしれない。

作品に使用した漢詩はこの授業で教わったものである。その日は「春」の字をテーマに勉強していた。この中国宋代の詩には後から曲がつけられたものがあり、その曲は<春歌>と名付けられている。作曲は何訓田という中国の作曲家。詩の形式は七言絶句。授業の中で、数千人の大合唱がゆったりとした曲調に合わせてこの短い詩を何遍も繰り返し歌っている音源を聴いた。曲調に大きな変化はないが、その繰り返しが大きな波のように何度も訪れる。薄暗い教室の中で壁に映ったスライド（詩が表示されていた）を全員が見つめながら、何度も繰り返すその詩を小さな声で口ずさんでいたあの時、自分はささやかな幸福を感じていた。それをうまく言おうとしても徒労に終わるように思われるが、あえてその幸福を分析しようと頑張るなら、その詩が示す人生の明るい兆しが、繰り返し押し寄せる渦の中で生じた大きな時間の感覚が、その出来事に異国の小さな薄暗い部屋の中で偶然の奇跡のように立ち会っているという尊さが、その部屋を包んでいた一体感が、そして間違いなくこの時間は過ぎ去ってしまうだろう（その一体感も、授業も、留学自体も）という儚さが理由だと言える。今この時の美しさに誰か気が付いているだろうか、この時を共有したことを皆がずっと覚えていることが出来たらどれ程素敵なことだろうと、振り返って

みると少し大袈裟に感じられることを思っていた。

春有百花秋有月、夏有涼風冬有雪。

若無閑事掛心頭、便是人間好時節。

春にたくさんの花があり、秋には月がある。夏に涼風があり、冬には雪がある。もし心に余計なものがなければ、この世はいつの時も美しい。

この詩が無門慧開という禅僧の読んだ詩であり、彼の書いた<無門関>という禅書に収められているというのは、一度目の留学を終えて帰国し暫く経った頃ネットで調べて知った事である。故にこれが禅に関係するというのは、『舞空』にとっては元々あまり重要な事ではない。この詩を作品で使いたいと思ったのはそれを知る以前の事である。

その授業以降、作業の合間やふとした時にノートやコピー用紙に教わった詩を書いていた。紙を変えペンも変え書いたりしてみた。曲を聴き、発音をし、中国から来た留学生の友人にその詩を知っているかと尋ねたりもした。そうする事であの授業の時に感じた感覚を再び想起しようとしていたのだと思う。

1-2 屋外で制作する

韓国芸術総合学校はその名の通り、美術院、映像院、演劇院、伝統芸術院など幅広い学科を抱えた総合芸術大学だ。通っていた石串洞キャンパスはソウル特別市の城北区にある。最寄りには6号線のトルゴジ駅。そこはソウルの中でも高層ビルが建ち並ぶような都会の中心地ではなく、大学の敷地はちょっとした丘の上あり、周辺を住宅街、幼稚園、教会、公園などに囲まれている。裏には山もある。キャンパスには棟が4つあり、一番西側に位置する棟の5階にアニメーション専攻がある。短期留学生の部屋はその階の端っこに充てがわれていて、普段そこで作業していた。部屋の斜め向かいにはベランダがあった。ベランダは視界が大変開けていた。見上げたときに電線や高層ビルなどの空を遮るものがなく、眼下には住宅街を見渡すことが出来た。多くの民家に屋上があり、そこにエアコンの室外機と共にキムチの壺が幾つも並んでいるのは日本では見ることのできない光景だった。そ

の住宅街の向こうには橋梁があり、その更にずっと向こうにはビル群と一緒に峰火山という山も見ることができた。天気がいいと留学生の友達とそこで外を眺めながら話をしたりした。普段学校と宿を往復する生活の中で、ベランダにあるそういった要素は自分が今異国の地で暮らしているという特別感を再認識させてくれた。そういう訳でこのベランダには開放的なイメージが強くあった。入って左側、方角で言うとおそらく西側に当たる面が大きなコンクリートの壁になっている。壁の高さは4メートルくらいだろう。印象に残っている光景がある。それは雨の日だった。入り口からベランダを覗くと、外に置きっぱなしにされたプラスチックの黒っぽい椅子が一脚雨に降られていた。濡れた水色の石の床で雨粒がピチピチと弾けて、椅子の虚像を映している。顔を上げると真っ白な空を背景に四角い灰色の壁がそびえ立っていた。大きな壁がいつもに増して巨大に見えた。

それとはまた別の雨の日。例の漢詩を教室で紙に書いていたときに、壁に水で文字を書こうと思い付いた。扉を出てすぐの所にあるベランダに行き、床に溜まった雨水を刷毛ですくって詩を書いた。机に置いた紙にペンで書くのと違い、おそらく垂直の壁に最初の一筆を置いた途端刷毛が含んでいた水が溢れ出してサラサラと幾本かの筋を描いたはずだ。水をしっかり含んだ刷毛は壁の上を滑るように動く。腕を肩から動かして大きく書くこともできる。汚れることを気にする必要もなく、屋外の開放感もあった。

後日晴れた日に三脚を立ててビデオを回し、壁に例の漢詩を書く様子を撮影した。七言絶句を七文字ずつ順番に、書いてはそれが自然に乾いて消えるのを暫く待ち、その上にまた次の七文字を書き、またその上に...という様子を映した。これはただ思いつきで撮影してみたものだった。それを例の中国語の先生にお見せしたら喜んでくれて、これは修了作品に関係があるものなのかと尋ねられたので、ただの楽しくて遊びでやったのだと答えたことを記憶している。しかし書いた文字が消えていってしまうということが、詩の世界観と通ずるものがあるように感じるということをその際少し話した。

パネルに水で描くことを作品づくりのためにやり始めたのは、帰国まで残り少なくなった五月の下旬か六月の頭だったと思う。修了制作は一年次作品『箱の中の天使』に習ってパネルの上に絵の具でドローイングしたものをコマ撮りするつもりでいたので、小さなマケットをつくってそこに試し描きをし、イメージを膨らませようとしていた。実寸大のものが無いと想像が難しいと思っていたので、250 掛ける 160 センチ程の大きなパネルも用意していた。このパネルは、鍾路 5 街にある材木屋に赴き、韓国人の友人に通訳をしてもらって角材と MDF を購入し、後に自分で組み立てたものだ。ホームセンターに当たる施

設がないのでビスは金物屋さんで買わなければなかったり、万力が調達できなかったのも自重でボンドを接着したり、インパクトドライバーの威力が弱くてビスが奥まで刺さらず結局手動で回したりと道具の面で色々苦勞した。パネルには追々絵の具で描いてテスト撮影をしてみるつもりでいた。マケットの仕事は問題を抱えながらもそれなりに進めていたのだが、大きいパネルに描いてみる気にはなかなか出来なかった。作業に踏み出す確証がもうひとつ持てなかった事と、とにかくその大掛かりな作業が億劫だったというのが理由だ。苦勞して作ったパネルを放置したまま時間は過ぎ、帰国の日が近付いていた。それで取り敢えず絵の具を使う前に、扱いやすい水で試してみることにした。

パネルに水で描いてコマ撮りをする作業をやってみて、偶然にも『箱の中の天使』で抱えていた幾つかの問題が解消された。まず、パネルが乾いて描いたものが勝手に消える事で自分の想像していなかった動きが映像の中に出現していたことに驚いた。『箱の中の天使』では絵の具の線を伸ばしていく仕事と消していく仕事を同時に即興でやっていたのだが、すべてが自分のコントロール下にあるので、せっかく即興でやっても自分が想像していないものを出現させる余地があまり無かった。使用した油絵具とアクリル絵具の粘土の高さも問題だっただろう。それでも余地が全く無かったわけではないと思うのは、制作中一度だけ筆が乗ってきてハイになったときに想像を超えたものが出現したように感じる事があったからだ。しかしそんな瞬間が訪れるのを待つことは非常に心許ないことのようにも思えた。また直線を描いたのは進む方向を明確にして頭で考える負担を減らすのに適していたからだ。だから多少は線が自分の意思から解放されている部分があったのだが、如何せんそうでない部分が多分にあった。動かすと同時に絵作りをしていたので、その動きが美しいかということ以上に、静止したその画面の構図が美しいかということに注意がいつてしまい、それが一筆一筆気持ちに負荷をかけた。即興でやるにはあまりに多くのことを抱えていた。その点水でやる仕事は気が楽だった。消す仕事は自然に任せることができる。そして自分の想像を超えたものを出現させたいという目的にも敵っていた。一人で完璧にコントロールする必要がない、自然に手伝ってもらっているという心持ちは芽生えた。四角い矩形の中にどう美しく描くかというのは依然として見過ごせないことだったが、描いたものがずっと画面に残り続けるわけではないので、静止した状態の絵の構図を完璧にしようとするより随分楽だった。画面に絵が溜まらない、複雑さが増していかない、画面が常に風通しのよい状態であるというのは心を軽くさせる。なぜなら絵描きは常に画面上に描かれた痕跡に縛られるからだ。(描く前の白いキャンバスですら頭の中では空

白でなく、すでに要素でいっぱいなのだが、)画面上に絵の具が溜まっていくにつれどんどん窮屈になり身動きがとれなくなる。絵が消えていくことでその縛りが削がれ、相対的に連続性の重要度が増した。つまり絵の運動により目がいくようになったので、作品はアニメーションの本質的（と筆者が考える）部分に一步近付くことができたのである。加えて屋外で撮影したことで画面に風景の移り変わりが映り込んでいたのも新しい要素だった。画面の中で光が移ったり雲が流れたりする様子を見たときに、絵の動きが提示する時間と別に、現実の世界の時間軸が映り込んでいるという風に感じた。残りの留学期間でパネルを壁に立てかけたり床に寝かせたり、日中や夜に撮ったり複数のシチュエーションで合計3分ほどになるテスト動画を撮影して、留学の成果として持ち帰った。（パネルは大きすぎて持ち帰れないので破棄した。）

1-3 自然と向き合うとは

帰国後屋外で水を使って撮影する仕事を引き続き行うため、撮影ができる場所を探した。大学の上野校舎、取手校舎、それと野毛山公園などを下見した。取手校舎は大学の敷地内に自由に使えるスペースが広大にあるため長期間腰を据えて制作するには適している場所であった。しかし下見をした際の違和感が拭いきれなかった。端的に言うと、この場所ではないと感じた。当時これから制作しようとする修了作品のテーマを、前述したような様々な感情や実感を集約して「自然との調和」という言葉で表していた。取手校舎は草木が生い茂っていて自然のパワーを感じられる場所ではあった。しかし画面の中にそういった緑が入ってきていいのかということが自分の中で引っ掛かった。緑が入ってくると作品が全く別のものになる気がしていた。取手校舎にいるとき、疎外感みたいなものを感じていた。その時取手には初めて訪れたし、校舎に人があまり居なかったし、辺鄙な場所に知り合いもなく一人でいたという状況のせいもあるだろう。しかし校舎の外階段の踊場から敷地を囲っている森や川を見たときに、その自然は決して優しいものではなく、寧ろ孤独を感じるようなものだった。それは韓国のベランダで制作しているときの心の平安とはかけ離れていて、作品に反映したい感情や雰囲気みたいなものがここでは得られないと感じた。その頃ゼミで山村先生に問われていたことがある。自然との調和というが、その自然とは一体何か。自然というとなんとなく癒しのようなイメージがあるが、あれは人工的に作られ

たもので、実際の自然はもっとワイルドなものである。或いは自分にとっての自然の源風景とは幼少を暮らした地元の環境のようなものなのか。そのイメージをもっと掘り下げないと、自然という言葉を使う底の浅さが露呈してしまう、というような事を言われていた。

私の地元は熊本県熊本市の西の方で、実家は市内の中心地とはやや離れた場所にある。都会ではないが特別田舎という訳でもなく、娯楽商業施設こそあまりないものの、スーパーもコンビニも少し歩けばあって、いわゆる普通の住宅街である。今はたくさん家が建ってしまったがまだ小・中学生の頃には近所に田んぼがいくつもあって、地元と自然という言葉結びつけようとしても思い出すのはその事くらいだった。

住んでいるアパート周辺の住宅街でテスト撮影を始めたのは、取手に行って感じた自然との距離に対する反動だったと言える。自然という言葉ありきで考えるのではなく、もっと実感の湧くような場所で作品を作る必要があると考えた。近所を歩きながら、なんだかここはいいなと感じるところに三脚を立ててそこに水で描いて撮影した。この試みは発展させられそうな兆しがあって、幾つか面白い画も撮ることができた。一方で公共の場所で撮影をする事になるので長い時間1つの場所に滞在して撮影する事が難しく、機材も毎回持ち運ばなければならないという欠点もあった。加えて炎天下の屋外で日光を浴びながら長時間の撮影をこなす事は体力的にも厳しいと感じていた。そして何より、実感の湧く場所という点を考えたときにどうしても、韓国のあのベランダのイメージが頭から離れなかった。水で描く絵がやがて降り出した雨と一体になって、その区別がなくなってしまうというアイデアが浮かんでいた。そうして住宅街の案か、韓国のベランダかで散々悩んだ結果、韓国で撮影することに決めた。しかし中間講評の時、山村先生の見解ではベランダ案は不安だと思っていると告げられた。その理由は、水で何を描くのかが決まっていないこと。そして、映像の結末が既に見えてしまっているからこれ以上面白い展開が期待できないということだった。

第2章 二度目の留学

2-1 モチーフの発見

9月1日に再び韓国に戻ってきた。戻ってきたはいいものの、明確な作品の形が見えていたとは言い難かった。何を描くかというモチーフの問題が未解決のままだったからである。しかしベランダに再び立った時に、不思議と不安は拭われた。ここでならきっと作品が作れるだろうという根拠の無い安心と、単純に再び韓国に戻ってくることができた喜びのせいだろう。道具は現地で調達した。弘益大学の大きな画材屋で筆を買い、商店街でバケツと霧吹きを買った。前回と同じ材木屋で角材とMDFボードを買い、今回は自分でパネルを作る時間が惜しかったのでお店で作って届けてもらうことにした。滞在期間が2ヶ月と決まっているので早速作業を始める必要があった。パネルが手元に届くまでに時間があるので、その間はパネルを使わなくていい作業をやらなければならない。それで手始めに普通に空を撮影した。闇雲に何かを描いてみる事は既にテスト撮影で試したので、調子を上げていくためにまず手軽に始められて、何かその後の作業のきっかけになることを期待した。それまで前回の韓国滞在の時にも、日本で撮影場所を探してテスト撮影している時も、空にカメラを向けたことはなかった。その日は晴天だった。

パネルがまだ手元に無かったので空を撮影する事から始めた。すると空にレイヤーがある事を発見した。高さによって雲の流れ方が違う！一つの画面の中に異なる時間の流れが同居する。〈当時の筆者のメモから引用〉

タイムラプスで撮影すると映像の中で時間の圧縮が起こる。そのため通常ゆっくりと動いているために気が付くことのなかった対象の動きが画面上にはっきりと現れる。普段空に浮かんでいる雲はゆったりと全体が一つの方向に動いているという風になんとも思っていた。しかし実際の空は高さによって風の吹いている方向も強さも違ったりする。撮影した映像には薄いカーテンのような雲の層と、塊になった雲の層が二層になっていて、それぞれが別の方向に、異なる速さで流れていく様子が映っていた。それはまるで、一つの画面の中に異なる時間の層が同時に存在しているように見えた。早々にこの発見ができた

事は本当に幸運だったと思う。それが雲の動きを壁に写すように描いていくきっかけになった。空を観察し、解釈し、それを描く。壁に霧吹きで滲みを作りそれを動かし始めた。

壁がすぐに乾いてしまうので同じ箇所にも何度も吹きかけて滲みのある程度定着させなければならない。それでも刻一刻と乾いていく。描けたらすぐにシャッターを押す。本当はもっとじわじわと動くように徐々に変化させたいのだが、乾く速度が速すぎてどうしても変化が激しくなってしまう。一気に全体が乾いてしまわないように、変化させたいところだけでなくそうでない部分にも毎回吹きかけて水を吸わせ、乾く速度を抑える必要がある。複数の塊を同時に動かすのは時間との戦いになってくる。5つくらいが限界。案外難しい。実際の雲は流れて行くうちに小さくなったりくっついたり、或いは無から量が発生するように見えるから面白い。けれども水で雲を描いていて、消えていくのは蒸発するのに任せるわけだし、描いていくうちに近くに寄ってしまった塊同士は勝手にくっつくし、原理としてはなんだか本当に雲と一緒にだと思った。〈当時の筆者のメモから引用〉

2-2 良い絵とは何か

韓国にいる間、太陽が出ている時間は撮影をし、暗くなったらその日撮ったものを編集するという生活を送っていた。編集といっても Premiere Pro のタイムライン上に撮影した素材を並べるだけである。1つのカットを撮るのに1日で終わることは稀で、最初撮ったものがうまくいかず撮り直したり、数日間持ち越したりすることもあった。絵コンテがないのにカットの長さをどうやって決めていたかというと、基本的には空が暗くなって撮影が継続できなくなった時に描いていた所までということにしていた。しかしその時点で長さが足りないと思ったら翌日も続きを描く。一度カメラの位置を動かしてしまうと再び同じ位置に置くことは不可能なので、動かすときは毎回悩み、勇気を出して決断する必要があった。1つのカットを撮り終えた晩は翌日どんな風に撮ろうかと考える。アイデアがいくつか浮かんでいることもあれば、何も無いままベランダに来てみて考えることもあった。とにかく思いついた様に撮影をしてみて、使えそうなカットを蓄積していくという方法だった。その中で失敗を重ねながら徐々に作品の形を見出していった。

描くモチーフとして雲を発見したことを書いたが、初めはその他に別の何かも必要だと思っていた。雲は自然を写すことだったので、もっと自分に近いものを描き、その対比を

構成しようと思っていた。（それが文字かと思って可能性を探った時期もあった。）しかし段々と雲だけで展開できると分かってきて、その他のモチーフは必要なくなった。

いつの頃からか意識する様になったことがある。カットの中で絵の動きを変化させないという事だ。一度描き始めたら同じ動きを続ける。変化させないというのは、途中で動きの速さや方向や質を変えないということだ。理由は、折角途中までうまくいった動きを途中で衝動的に変化させてしまって不自然な感じになることが多かったからだ。そうすると途中までを切って使うから動きの継続時間が短くなってしまい、編集の時に使い勝手が悪い。カットが短いと作品が忙しい印象になってしまいそうで避けるようになった。出来るだけゆっくりと、それが自ずと変化していく様な動きを目指した。途中で動きを変化させようとするということは、そこに自分の意思を反映させることになる。そうした自分の意思が感じられる動きほど不自然に見えた。はじめにそれが動いていく方向を決め、あとは蒸発が絵を消していく作用に押し出されるようにして描き加えていった。そうになっていく力に任せ、なるべく自分で動かさないようにするコツを徐々に掴んでいった。

そう言ったものの、撮影したものをしばらく経って見返した時に、ずっと同じことを繰り返しているだけに見えて面白みに欠けるのではないかと思うこともあった。緩急や意外性も必要だと思ったが、狙って描くとうまくいかなかった。

面白いものは、自分で作り出そうとした時でなく、より自然の動きに迫ることが出来た時に現れてくるのかもしれない。雲の動きをよく観察すると、ゆっくり動くことだけを意識した自分の絵との違いが見えてきた。雲の動きの本質は輪郭線の緩やかな変形、移動にあるのではなく、部分が独立して生成・消滅しながら全体が形を保ち、それが緩やかに変形、移動しているように見えることにあることに気が付いた。そこに自然の深さみたいなものを垣間見た。その事を意識してうまくいったのが本編の4分17秒あたりに使用したカット。雲の動きの細部に迫っていくようで、パネルの四角形が空（画面に切り取られた四角い空）と重なり、雲が空を覆っていくような迫力が出た。正確な雲の動きには見えないが、そうあろうとしてそうなりきれなかった、物質的な個性みたいなものの差異が強度になっているのかもしれない。

壁全面を使って巨大な動きを描こうとしたカット。乾くスピードの問題で滲みのように描くのは不可能で、より素早く描ける線を使った。脚立を毎フレーム移動させ、足元から壁の上の淵までの大きく絵を上昇させた。単体で見ると迫力があって面白いカットだが、

結局使わなかった。形が概念的で、描こうとする意思がより強く滲み出てしまったように見える。

2-3 描く行為と自然の振る舞い

筆で床に描いていたカット。画面の手前から奥に向かって、水跡を動かしていた。描いている面積が広く手数も多いので、1フレーム描くの何分もかかった。10月下旬に差し掛かり太陽が低くなったせいで、午後2時近くまでベランダに建物の影が落ちるようになっていた。日没も早まり午後5時半頃には暗くなっていた。実質撮影出来る時間は3時間程度で、1日に動かせる秒数は2、3秒程度にしかない。それでも、そのカットはそれまで撮影していたどの場面より美しかった。だからこの瞬間が1フレームでも長く映像の中に存在し続けられるように、とにかく素早く撮影することに努めた。初日は筆を直接握って描いていたのだが、屈伸運動の時間と疲労を軽減するため、柄に長い棒を取り付けた。それにより中央の部分にも外側から手を伸ばして描くことが可能になった。絵の回りをぐるりと一周しながらできるだけ手を止めず、一カ所描いたら近いところへ、また近いところへと筆を低く滑らせて行った。描いているとうより、筆先で水を突ついていると言った方が正しい。描いてはシャッターを押しての往復を何周もするうちに導線がなんとなく決まっていき、一連の行為が自動化されていった。蒸発は常に起こっているので一度始めたら同じリズムでずっと続ける必要がある。途中でシャッターを押す間隔が極端に開いてしまうと、その時だけ蒸発が急に進んで不自然な動きになってしまうからだ。描き足す量が蒸発して消える量を上回ると床の乾いているところが無くなっていくので、一筆一筆描きすぎではならなかった。動的平衡という言葉思い出したのはその時だったかもしれない。生成と分解が常に同時に起こりながら全体のバランスを保つ。分解の速度が生成の速度をわずかに上回るによりその流れは保たれる。川が流れるように水が床を這い続けるためには、描く速度と蒸発の速度のバランスが重要だった。そして蒸発の速度をコントロールする事は出来ないで、自然のペースに従って絵を描かされていた。自分は描いているのか、或いは描かされているのか。自動化された運動を繰り返すうちに、意識の中でその境界は段々と曖昧になった。局面では自らの行為と自然の振る舞いがせめぎ合いながら、全体の滞りない流れを作り出していた。

2-4 構成

撮影を積み重ねながら作品全体の構成を徐々に組み立ていたので、早く構成を決めない
と間に合わないという焦りも同時にあった。一旦構成に専念し、学内の図書館やカフェで
パソコンと向き合い、今まで撮影してきたカットをタイムライン上で色々と並べ替えて作
品の大まかな流れを作ろうとした時期もある。見せ場になるような画がいくつか撮れてい
たので、それを中心に、足りないところを補うシーンを考えイメージをノートに書き出し
た。それが上手くいかなければ流れを言葉で整理しようと試みた。何度も練り直したが、
とうとう全く手が付けられず街に出掛けて一日人物のスケッチをして気を晴らしていた。
週に一日は作業しない日を設けると決めていたが、二、三日何もしないことも度々あった。
(数日ベランダに現れないと中国人留学生の友達に心配されていた。)

2-5 海の音

いつ何時の事だったか正確には記憶していないが、撮影も終盤に差し掛かった頃、ベラ
ンダで撮影をしている時に、作品の中で海の音が鳴ると思った。何かとてつもない事だと
直感して、その意味を必死に想像した。点在していた作品の中の様々な要素が、やはり見
えないところでは繋がっていて、それらを繋ぐイメージを見つけ出したようだった。ベラ
ンダと空。水。蒸発。雲。絵を描くこと。壁に浮き上がる巨大な文字。中国の古い詩。そ
して海。

海の音。太古のビジョン。中国の詩が時を超えて響いてくる<当時の筆者のメモから引用>

壁に浮き上がる巨大な中国の詩は、海の向こうの大陸から時を超えて響いてきたものだっ
た。ベランダで水を使って雲を描きそれが大気に還っていく時、そこから遠く流れてどこ
へでも行く事が出来る。水や大気や雲や雨は、そんな風にしてずっと昔から変化し、廻り
続けてきた。今このベランダにある水もいつかは太古の海で、その時の記憶を持っていた
かもしれない。ベランダから遠く流れた雲は時間と空間を超え、海を渡り、遥か昔の大陸
から一編の詩を運んできた。

第3章 帰国後

3-1 編集

帰国後すぐに大学でピクチャーロックの完成上映があった。撮影しながら同時に編集も行っていたので、細かいタイミングの調整やカラコレを残して大方編集は済んだつもりでいた。しかし意に反して、完成上映の講評で各教授から総じて、まだまだ編集が足りないという旨の言葉を頂いた。総評で岡本先生が、ここからの段階は客観性が大事になってくる。多くの人に見てもらって意見を貰った方がいい、とおっしゃっていたのを手帳に書き留めておいた。素材は出揃っていて、これ以上増やすことは出来ない。では素材を並べる順番を変えたら良くなるものなのか。そもそも良くなるとは何だろう。

1つ問題は分かっていた。確かに自分でもうまく説明がつかないまま並べている部分があった。そしてその部分はリズム感で繋いで、うまく並んでいるように自分を納得させてしまっていた。それともう1つ、同じ画面を見ていても、人によって見ている部分が違う事にも気付かされた。最終的な映像では使用しなかった(図4)のカットを例に挙げると、自分は画面中央の雲の動きに着目していたのだが、画面下に街が映っているために、街の風景を見せた事の意味を問われることがあった。他のカットではこのように街が映っているものが無かったからだ。何故こうした事が起こったかと言うと、1つの画面に複数の要素が混在していたからである。晴天・曇天・雨天、壁に絵・パネルに絵・床に絵・絵が無い、水溜りがある・無い、街が映っている・映っていない等、様々な要素の組み合わせが何通りもあったせいで、自分が着目している部分だけを見て編集した結果、観る人との間に齟齬が生じてしまった。だからまずは、絵と雲のやり取りがあり、やがて雨が降るという始めのシンプルな流れがすっきりと見えるようにした。そうして整理してみると、雨で使えるようなカットが少なく、画としても盛り上がりには欠ける事が分かった。雨が降るという出来事の後に、水がベランダを支配する場面を加える事にした。絵と空とのやり取りがあり、絵が空に重なったところで、巨大な詩が壁に現れ、やがて雨が降り、水が支配し、そして蒸発して空に還る、というような構成に至った。追加した水がベランダを支配する場面とは、「2-3 描く行為と自然の振る舞い」で書いた(図3)のカットの流れである。そのカットについては多くの人に、自然の動きか描いているのかがよく分からないという意見を貰っていた。それなので雨が降り、描く行為と自然の振る舞いとの境界が最も曖昧になる場面として使った。

振り返ると単純な整理をただけだが、撮影を終えて帰国した後、最終的な形に落ち着くまでに撮影と同じくらいの期間がかかった。しかし編集を最後まで格闘する事が出来たのは、今回これまで作品を作ってきた中で最も伝えることを意識したという理由が大きい。以前は究極的には自分が理解していればそれでいいと思っている所があった。それが今回別の気持ちで作品に向き合う事ができたのは、中国の先生に伝わってほしいと思ったからだ。授業を通して受け取ったこと、物事がこんな風に見えていると、伝わればいいと思った。伝えるという作用は何もストーリーを語るということに終止しない。画材の選択、モチーフの選択、場所の選択、詩の選択、それらの関係性によってテーマを伝える方法もある。学部の人に油画専攻だった事が関係するのかは分からないが、自分はどうもそういった事の方に意識が行きがちで、それ以外のことは文脈や目に見えているものに関係なく勝手に想像力で補ってしまうような所がある。二度目の留学の前にも、岡本先生に作品に関して事前にどこまで準備していくべきかをご相談した折に、構成と、映像的なストーリーテリングをした方がいいのではないかと助言をいただいていた。

3-2 あるがままであること

帰国後専攻内外のプレゼンで詩の内容について尋ねられその都度言葉を探しながら答えていたが、説明しようと言葉にする度に、自分の口から出る言葉が言おうとしている事の本質を捉えきれていない気がした。自分の説明が自分にとっても説得力を欠き、そんな事を繰り返す内に、どうしても詩を使いたかっただけで、冷静に考えると作品にとっては接点を持たないのではないかと考えるようになった。企画の段階で、詩に出てくる花、月、風、雪などを描いたらどうかという助言を貰う事があったのだが、それはどうしても嫌だった。やりたいのは作っていく実感の中で何かを発見しながらそれを形にしていくことだった。花、月、風、雪などを描くと決めてかかると、その場所で制作する意味や自由さが奪われ、作品は本質を見失ってしまうように感じていた。ずっと言葉に出来ないでいたことの輪郭を捉えることが出来たのは<無門関>を読んだ時だった。実に作品が完成する少し前のことだ。

十九 平常是れ道

南泉和尚はあるとき趙州から、「道とはどんなものですか」と尋ねられ、「平常の心こそが道である」と答えられた。ついで趙州が、「やはり努力してそれに向かうべきでしょうか」と尋ねられると、南泉は「いや、それに向かおうとすると逆にそれてしまうものだ」と言われる。「しかし、何もしないでいて、どうしてそれが道だと知ることができるのですか」と趙州。そこで南泉は言われた。「道というものは、知るとか知らないとかいうレベルを超えたものだ。知ったといってもいい加減なものだし、知ることができないといってしまうえば、何も無いのと同じだ。しかし、もし本当にこだわりなく生きることができたならば、この大空のようにカラリとしたものだ。それをどうしてああだこうだと詮索することがあるうか」。この言葉が終わらぬうちに、趙州はいっぺんに悟った。

頷って言う、

春に百花有り、秋に月有り、

夏に涼風有り、冬に雪有り。

つまらぬ事に心を掛けねば、

年じゅうこの世は極楽さ。

ベランダで絵を描いている時あくせく動き回らる中で、自分の行為、一筆一筆が、いま自然と調和を生み出しているという感覚を覚えて嬉しくなった事がある。プレビューした画面の中で、水が、雲や光の移り変わりと同じように存在して見えた時に、描く行為が自然の振る舞いと近づいていることを意味している気がした。まるで自然の循環の中に居場所を得たようで、大きな川の流に溶け込んでいくような気分がした。もし描くことをやめたなら水は蒸発の作用に押し流され消えてしまう。流れを止めることになる。しかし消えたように見えるものも、姿を変えて流れ続けている。移り変わり続けることが自然のあるがままであるならば、描き続けることはそれを少しの間目に見える形にすることなのだと思う。

結論

作品の内容に関して事前に決めてしまわず、その場で感じたことや発見したことを大事にして制作することを選んだ。屋外で水を使って撮影したことで、雲、日光、蒸発、水面の反射など示唆を与えてくれる外的要因が多く存在した事がまず企画の出発点として成功した点であると思う。それを如何にして作品の根幹に取り込むかが、この作品の強度を左右していた。調和というキーワードは最初の留学を終えた段階で出てきていた。しかしその時点では調和というのが、自然の中で撮影をする、蒸発を取り込む、といった手法的な事に留まっていて、その手法によって映像の展開の中でどのように表現していくかという事が二度目の留学の課題だった。韓国の学校のベランダは空が印象的で、雲をモチーフに選択したことで、撮影環境から受ける刺激を作品に活かすことが出来たと思う。画材(水)、モチーフ(雲)、現象(蒸発、雨)に水という共通項が出来たことで作品が内包する意味に広がり生まれた。二度目の留学では撮影と構成を同時に行っていた。とりあえず撮り始めたものには偶然や無意識の要素が含まれている。そうして出てきたものに対し、一貫した視点から批評性を働かせられるかどうかには作品の組み立て懸かっていた。そうして振り返ると、構成が難航した原因は批評の視点がぶれてしまったことにあると考えられる。

「2・2 良い絵とは何か」で失敗の一例として言及したカット。迫力のある画が欠けていると思ったので、壁一面を使い、大きくてゆっくり動くものを描こうと試みた。しかし描く面が大き過ぎて他のカットのように霧吹きで滲みのように描くのは不可能だったため、輪郭線でふわふわとした概念的な雲の絵を描いた。このカットは作品後半の山場で使うつもりだった。絵が概念的になることが、それまで自然との調和を志向してきた中でどういう意味合いを持ってくるかということが見えていなかった。(実際山村先生にご指摘されるまで気が付かなかった。)これが実に帰国の1週間前に撮ったものなので、撮影終盤までいかに視点が揺れ動いていたかが分かる。その結果帰国してからの編集でも苦労した。

今回の経験から言えることは、作品づくりには、目の前で起きている事を何度も解釈する過程が不可欠だったということだ。その解釈がどれだけ前に進んだかが作品の強度に影響する。既に完成してしまった『舞空』についてでさえ、そのうち今とはまた解釈を変えるのだと思う。

謝辞

最後に、修了作品『舞空』にご協力くださった皆様に心より感謝致します。

韓国へ二度も短期留学に送り出して頂いた岡本教授、江口さん。快く迎えてくださった韓国芸術総合学校の李先生、ケイさん、サンアさん、スタッフの皆さん。韓国で作品を作ることが出来て本当に嬉しかったです。貴重な経験をさせていただきありがとうございます。ご心配、ご迷惑もお掛けしました。作品を完成させることが少しでも恩返しになればと思い頑張ることが出来ました。本当に感謝しても仕切れないくらいです。江口さんが出世払い楽しみだねとおっしゃったのでこれからも頑張ります。成星先生。先生がいた韓国の3ヶ月間は自分にとって大切な時間でした。いつかまた先生のもとで教われたらなと思います。本文で言及出来ませんでした。音響を担当していただいた音楽環境創造科の向谷さん。曖昧で伝えきれていない言葉にも、とても初歩的な質問にも丁寧に向き合ってください嬉しかったです。山村教授には作家として、指導者としての在り方から沢山の事を学びました。いつも的確なご指導をありがとうございました。伊藤教授、布山教授には講評の度に貴重なご意見を頂き、新しい視点に気付かせていただきました。高山先生にはMAで大変お世話になりました。助教授の松本さん、助手の久保さん、河野さん、矢野さん。ゆんじえさん。2年間サポートしていただきありがとうございました。その他にもお世話になった皆様にお礼を申し上げます。

制作記録「舞空 / Dissipate」

東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻

学籍番号 1234567

齊藤光平/Kohei SAITO

指導教員 山村浩二

2019 年 3 月 15 日

- 9/7 壁と空 / 動画 / 未使用
- 9/7 壁と空 空のレイヤーの発見 / コマ撮り / 未使用
- 9/7 壁に雲 / コマ撮り / 未使用
- 9/8 壁に雲 / コマ撮り / 未使用
- 9/9 壁に雲 / コマ撮り / 1:30
- 9/9 暮れていく街 / コマ撮り / 未使用
- 9/10 筆とバケツ / 動画 / 0:28
- 9/10 壁に雲 / コマ撮り / 1:42
- 9/11 前日のカットの続き
- 9/12 壁に横線 空のレイヤーの試み / 動画 / 未使用
- 9/12 前日のカットの続き
- 9/12 壁に雨が垂れる / コマ撮り / 6:15
- 9/13 壁に立てかけたパネルの部分に水滴 1 / コマ撮り / 未使用
- 9/13 壁に立てかけたパネルの部分に水滴 2 / コマ撮り / 未使用
- 9/13 流れる雲 / コマ撮り / 2:33 と 4:02
- 9/13 パネルの縁と空 / コマ撮り / 未使用
- 9/13 パネルに詩 / コマ撮り / 未使用
- 9/13 床に詩 / コマ撮り / 未使用
- 9/14 春有百花 / コマ撮り / 未使用
- 9/14 秋有月 / コマ撮り / 5:10
- 9/14 夏有涼風 / コマ撮り / 5:33
- 9/14 冬有雪 / コマ撮り / 7:35
- 9/16 壁の巨大な滲み / コマ撮り / 未使用
- 9/17 壁と空 / コマ撮り / 未使用
- 9/20 曇天 パネルの正面から引きで 風が吹くように / コマ撮り / 5:49 あたり
- 9/21 パネルの正面 文字のように / コマ撮り / 未使用
- 9/22 パネルの正面 文字のように / コマ撮り / 未使用
- 9/24 パネルの正面 文字のように / コマ撮り / 未使用
- 9/25 パネルの正面 文字のように / コマ撮り / 未使用
- 9/26 パネルの正面から 晴天 / 2:52

- 9/28 パネルの正面から 床に水が吹く 奥へ / コマ撮り / 3:02
- 9/29 パネルの正面から 床に水が吹く 左から右へ / コマ撮り / 3:08
- 9/30 パネルの正面から 床に水が吹く 左端からゆっくり / コマ撮り / 3:15
- 10/1 パネルの正面から 晴天 / コマ撮り / 2:25
- 10/1 パネルの正面から パネルを煙が昇っていくように / 3:22
- 10/4 パネルの正面から 左上から右下へ / 未使用
- 10/4 パネルの左斜め前から / 3:45
- 10/5 雨が降る床 左斜めから / 動画 / 未使用
- 10/5 パネルの正面から引きで 雨 / 動画 / 未使用
- 10/5 雨の床アップ / 動画 / 未使用
- 10/5 パネル右斜めから 雨 / 動画 / 未使用
- 10/5 パネル左斜め下から引きで / 動画 / 未使用
- 10/5 雨の床 手持ちで / 動画 / 未使用
- 10/5 雨の床に映るパネル / 動画 / 未使用
- 10/5 雨の床に映るパネル 筆あり / 動画 / 未使用
- 10/5 雨の床に映るパネル 豪雨 / 動画 / 未使用
- 10/5 雨空のみ / 動画 / 未使用
- 10/5 壁と雨空 / 動画 / 未使用
- 10/5 パネルの正面から 雨 / 未使用
- 10/5 水面に映るパネル / 未使用
- 10/9 パネルいっぱいの水の痕 / 4:05
- 10/10 パネルいっぱいの水の痕 / 4:12
- 10/10 ベランダから見た街と雨空 / 動画 / 未使用
- 10/10 雲 / 動画 / 4:23
- 10/10 床の水たまりに映る太陽 / 動画 / 1:54
- 10/10 雲 / 動画 / 未使用
- 10/10 床の水たまりに映る雲 / 動画 / 7:48
- 10/11 渦を巻いて散開 / 未使用
- 10/11 パネルいっぱいの水の痕 / 4:15
- 10/13 パネルに雫 / 6:22

- 10/14 床を這う水 / 2:08
- 10/16 床を這う水 / 未使用
- 10/17 右斜めから 壁を斜めに昇る水の痕 / 未使用
- 10/18 川のように流れる水 / 6:49
- 10/19 川のように流れる水 / 未使用
- 10/22 鱗雲と太陽 明け方 / 動画 / 未使用
- 10/22 水たまりの床に波紋 / 動画 / 7:18
- 10/22 水たまりのアップに映る雲 / 動画 / 未使用
- 10/20 川のように流れる水 / 未使用
- 10/22 川のように 正面から / 6:55
- 10/23 川のように 寄り / 6:59
- 10/23 回る床 / 7:07
- 10/25 回る床 / 7:09
- 10/26 壁を昇る / 未使用
- 10/26 壁と雨空 / 動画 / 未使用
- 10/26 低い雲と街並み / 動画 / 未使用
- 10/27 右斜めから 見下ろす構図 / 未使用
- 10/30 壁を昇る / 2:01
- 10/31 壁を昇る / 2:13
- 11/1 春有百花
- 11/3 正面広角 壁を昇る雲 / 未使用
- 11/4 正面広角 壁を昇る雲 / 未使用
- 11/5 正面広角 壁を昇る雲 / 未使用
- 11/6 正面広角 / 動画 / 未使用
- 11/8 壁と雨空 / 動画 / 未使用
- 11/8 正面広角/ 動画 / 6:36
- 11/8 正面広角 雨 / 未使用
- 11/9 正面広角 吹き上がる / 6:31
- 11/10 正面 舞い上がる雲 / 8:09